

Transitional Topics 2011.3.11—2015.3.11

中野 豪雄 | TAKEO NAKANO

2011年3月11日の東日本大震災から4年にわたる話題の推移を題材に、情報の構造化と文脈の可視化をテーマにした「データが織りなすビジュアル」です。画面が大きいポスターでは全体を俯瞰して見ることと詳細に読むことが可能です。情報にひも付けられた文脈や、言葉や話題性の在り方について思考する糸口の提供を目指しました。

ABOUT TRIAL

トライアルについて

●制作の背景

デザイナーの仕事が問題解決だとするならば、グラフィックトライアルの問いはデザイナー自身に向いています。それなら自分がグラフィックを通して伝えるべきだと思ふことを題材にしようと、東日本大震災に関連したインフォグラフィックスを表現することにしました。

あの時は膨大な情報が駆け巡り、世の中は凄まじい喧騒に包まれましたが、その中で僕はものすごい無力感を感じていました。本来、グラフィックデザイナーは混乱している情報を正しく整理して適切に届けていくのが役割なのに、何もできなかったからです。その思いは震災以降、実践や教育の場でインフォグラフィックスの可能性を探求することへの原動力となっていますが、今回のトライアルを機会に、改めて当時の混乱を見つめ直すことをテーマにとらえた、問題提起を担うグラフィックデザインに挑戦したいと思いました。

ビッグデータはネットワーク上に偏在している状態では単なる数値にすぎません。ある視点で切り取り、編集することでアクチュアルな情報へと変化します。それはカメラマンが一瞬を切り取って1枚の写真に凝縮させるのと少々似ている気がします。この作品も「何を伝えたいか、何を見せたいか」を判断しながら膨大な情報を写像として切り出しています。同時にそれはデザイナーとして、自分自身の問題意識と向き合うための糸口を探るトライアルになると思います。



●コンセプトとテーマ設定

2011年3月11日から4年間にわたり、「東日本大震災」とその他のさまざまな言葉がどのような話題をつくり、時間と共にどう推移していったのかを提示したいと思います。具体的には日々のニュース記事に出現した言葉を、話題性の強さ／「東日本大震災」との関連度／言葉の出現回数／という3つの指標によってデータベースから抽出し、視覚化を試みます。例えば、外縁にある暖色系の大きな円は震災に関連するニュースが突発的に多く報じられたことになり、反対に中心近くにある寒色系の小さな円は震災とは異なる文脈を持つニュースが少なからず報じられていたことを表します。これを1カ月から4年間までの異なる5つの時間軸に展開し、話題性や人々の意識の揺らぎをさまざまな視点から読むことができる5枚のポスターとして仕上げています。

印刷としては、このグラフィックのプランをどう版構成に置き換え、かつ意図した表現をどのように実現するかがテーマです。第1のポイントは、作品の肝である「東日本大震災」との関連度を表す10色をそれぞれ別版にしてデータと版の意味合いを重ね合わせること。第2のポイントは色を重ねるほど明るくなる光の原理（加法混色）を、色を重ねるごとに暗くなる印刷（減法混色）で再現することです。データに視覚要素を与えるとともに、これを印刷のテクノロジーに置き換えて、考える「起点」を示すグラフィックを目指します。

データの構造をグラフィックに落とし込む

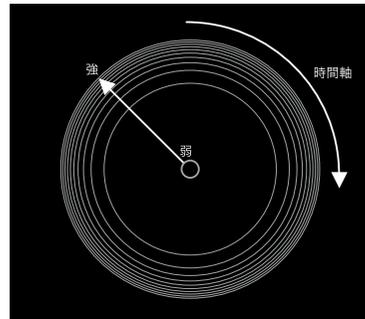
「情報やデータを関連づけることで別の見方や新たな意味を提示する手法“インフォグラフィックス”を、印刷技術と連動させます。データベースから抽出した指標を版や配置、色、大きさなどに割り当てて視覚情報に置き換えることで、版の設計とデータの構造にインタラクティブな関係を築きます。これを時間軸の異なる座標に落とし込み、5枚のポスターに展開します」

3つの指標を視覚情報に置き換える

情報を構成しているのは3つの指標。指標1は「話題性の強い言葉」。2011年3月11日から2015年3月11日までの4年間に配信されたニュース記事に出現した固有名詞から、上位にランクされたものを1日ごとに抽出したものだ。さらに、指標2「東日本大震災との関連度」、指標3「出現回数」を設け、この3つの指標それぞれに配置、色、大きさを割り当てた。

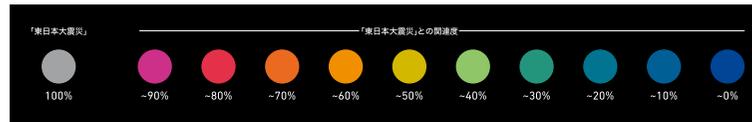
●指標1：話題性の強さ＝中心～外縁からの距離

「対象期間内に多く出現し、対象期間外にあまり出現しない」ことを定量的に分析し、導き出した値。
※「日々の重要キーワード（1日ごと）」東日本大震災ニュース分析」による



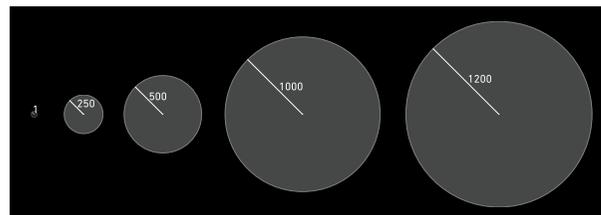
●指標2：「東日本大震災」との関連度＝配色

「話題性の強い言葉」が「東日本大震災」という言葉と共にニュース記事に出現した回数。



●指標3：言葉の出現回数＝円の大きさ

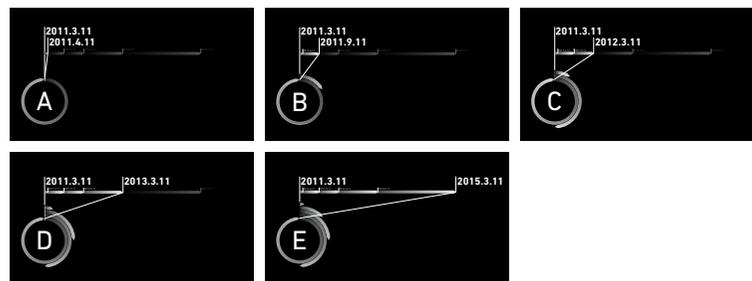
「話題性の強い言葉」がニュース記事に出現した回数。



5つの時間軸で話題の推移を俯瞰する

ポスターは1カ月間から4年間まで、徐々に時間軸を圧縮しながら展開する。鑑賞者はマクロとミクロの視点を自在に横断しながら、「東日本大震災」とその他の言葉がどのような話題をつくり、時間と共にどう推移したかを俯瞰することができる。

●5枚のポスターの時間軸の推移

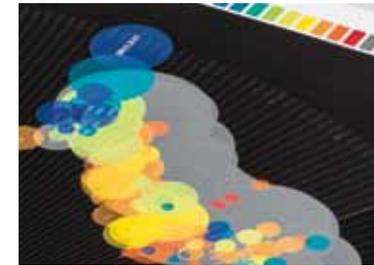


重層する円の表現

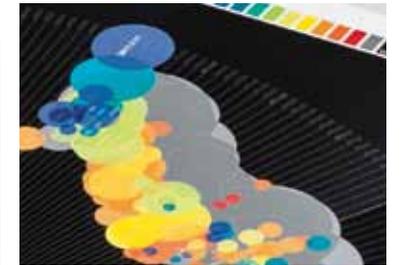
「円が重なると明るくなる」というルールを実現するには、円が重なった部分ほど明るく見せなければならぬ。しかし、インキは刷り重ねるほど明度が下がる。そこで、このルールを実現させるための方法を探った。

ポイントとなったのは円の背景。この円の重なり回数に応じて、円の背景に段階的にスミの平網を入れたものと、円の背景にスミを全く入れないものを比較した。

●調子版で明度差をつくる



●ヌキ合わせで明度差をつくる



円の重なり数に応じてスミの平網を組み合わせた背景の透け具合を再現した。発色は若干弱まるが重層感が出た。



円の背景にスミを全く入れない版を作成。発色の強さはあるが重層感が弱い。

背景の作り方

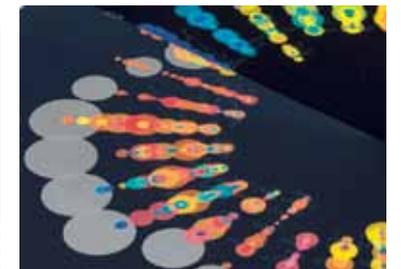
背景は銀以外のすべての版を100%で刷り重ねた黒。そこに重なるグラデーションは時間軸の流れと区切りを表すことが目的となっている。背景の黒に溶け込みながらも、遠目からもしっかりと視認できる強さを持たせ、始点と終点の差分を明示したいという中野氏の意思の反映を目指した。

●全色ベタ+銀の調子版



モノトーンの抑えた明度が適度に溶け込んで背景として成立しながらも、銀の微妙な光沢と他と異なる質感が時間軸の始点と終点の差分をしっかりと主張した。

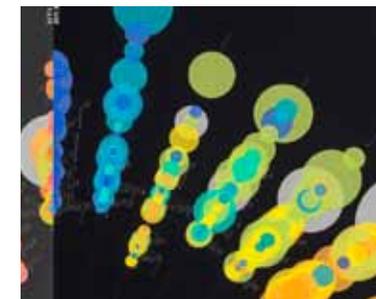
●全色ベタ+白の調子版



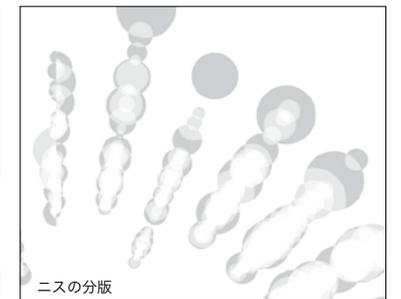
背景の黒の最上部にあるブルー版の影響を受け、青みを帯びた。背景としっくりとなじんで見えるが、その分変化を主張する力が弱まった。

円の明度とボリュームをニス版で調整する

刷り重ねた背景の強烈なグロス感に対し、重なる版数が少ない円は相対的にマットな質感が際立つため、最後にグロスニスを刷った。色相を変えずに積層部分の明度を調整することと、微妙に濃度を上げて重層感をアップすることが目的。銀の部分はニスを刷らずに銀インキの質感を生かした。



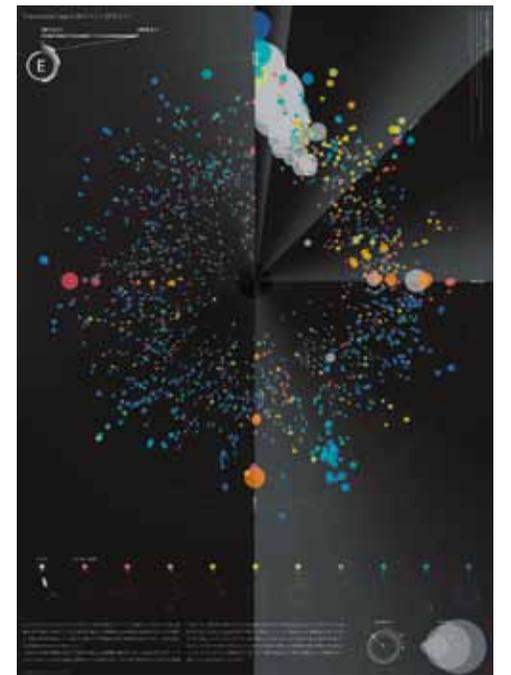
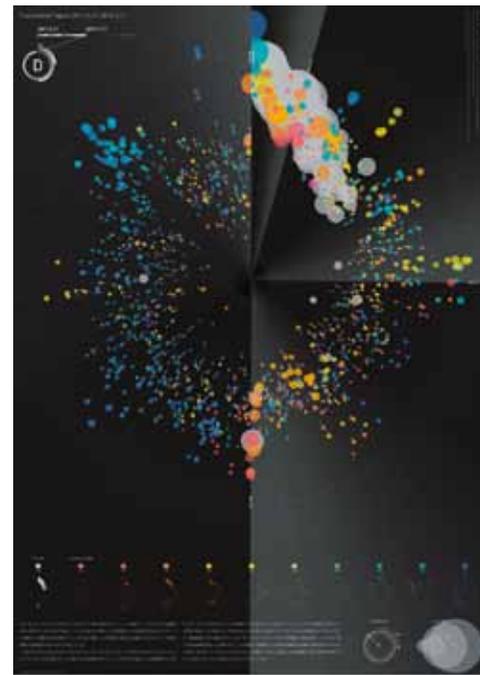
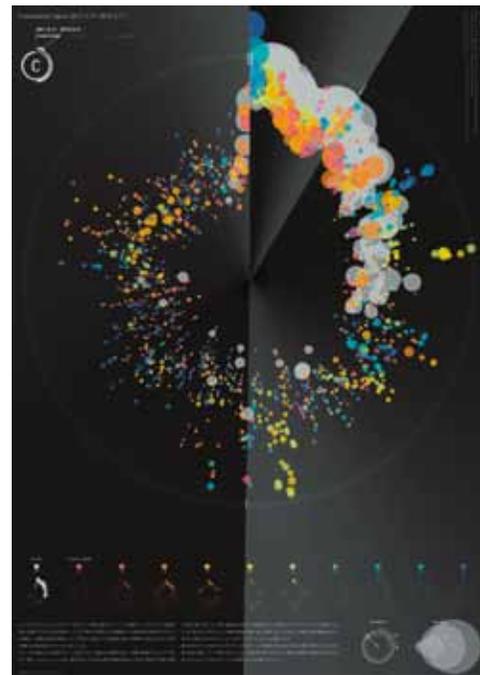
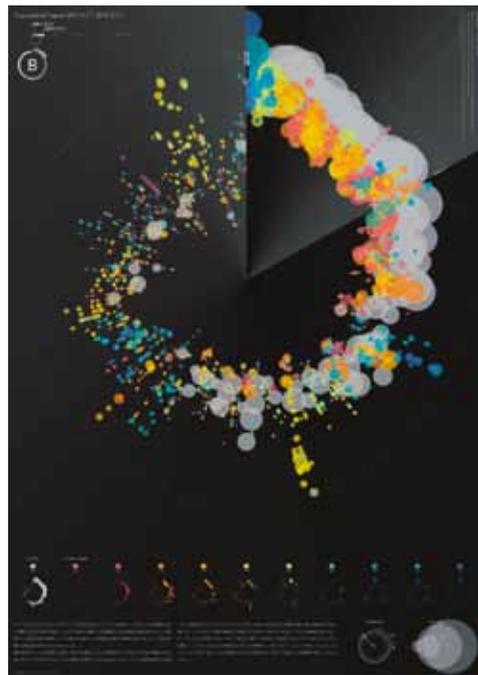
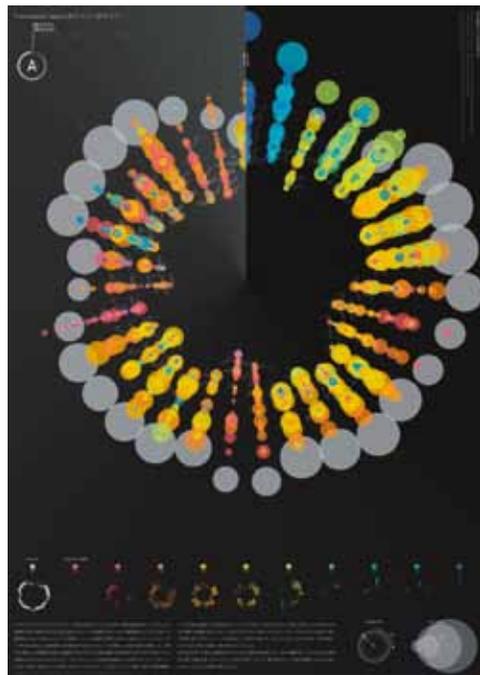
銀以外の円に、重なり具合に応じたグロスニスを刷り重ねた。円の発色が微妙に強まって深みが増し、ボリューム感も高まった。



ニス版には、円の積層感を出すために最下層に刷ったスミの版（調子部のみ）を転用。つまり円の部分は特色をスミとグロスニスで挟み込んだ形になっている。

FINISH

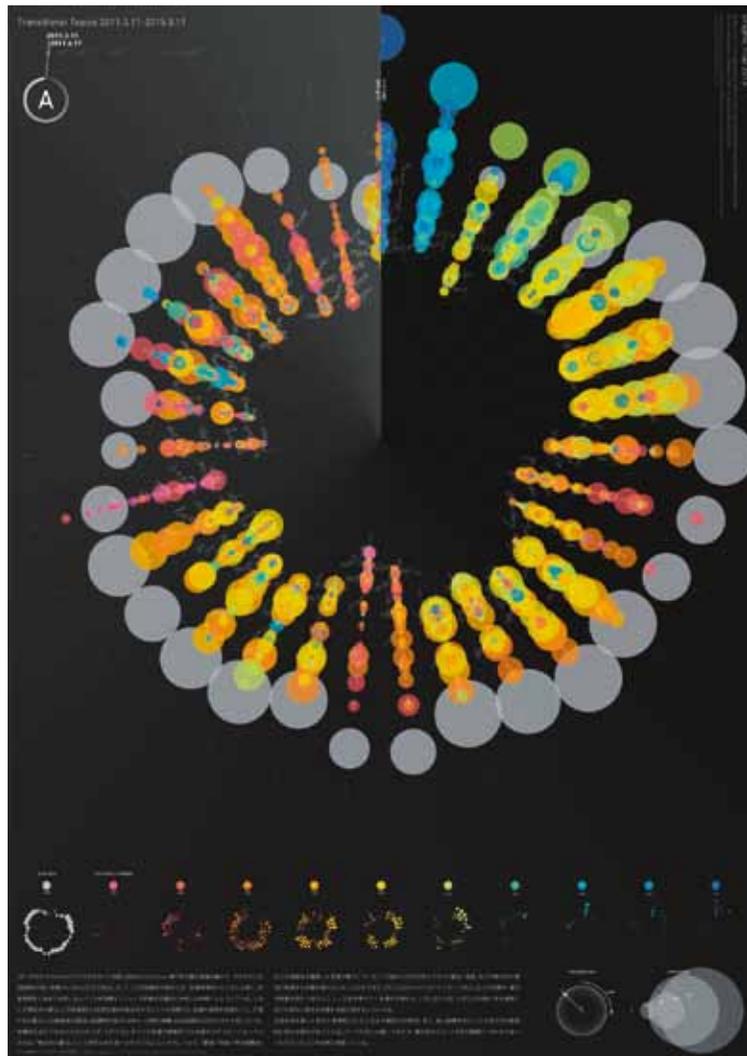
全作品



Art Direction & Design : 中野 豪雄
Data Archive and Analysis : 北本 朝展
Programming Production : 古堅 真彦

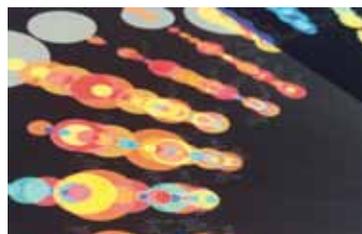
POINT & COMMENTARY

ポイントと解説



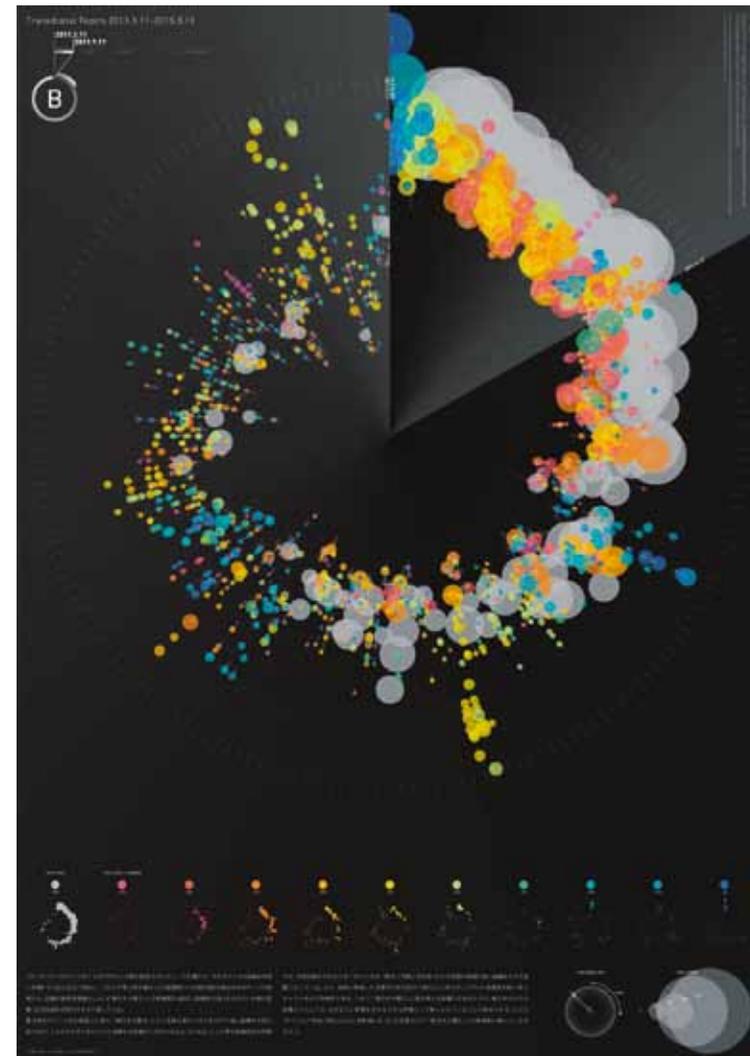
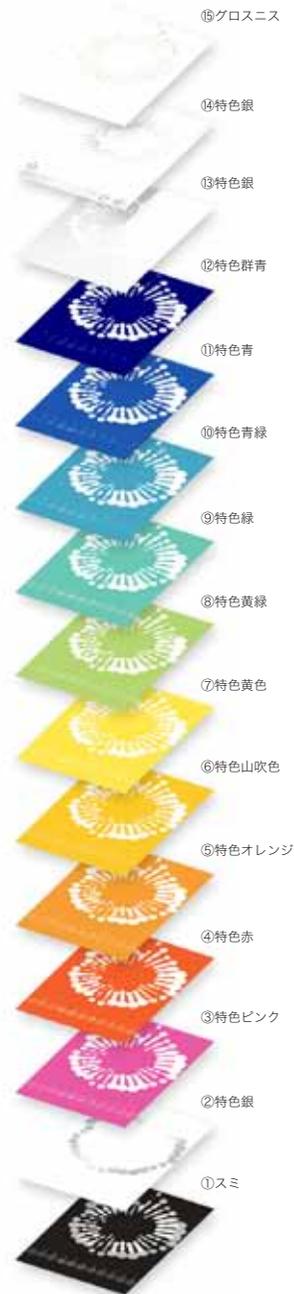
用紙：OKミュージズガリバーグロスCoC（ホワイト）／四六判 135kg

POINT



「3月11日から1カ月間の話題の推移を視覚化しました。圧倒的な量の暖色の大きな円が外側に集中していることから、東日本大震災と関わる話題性が強い言葉が頻発しており、異常なほどの喧騒だったことが読みとれます。震災当日が真っ青なのは、『東日本大震災』という言葉が一般的な用語として定着していなかったからでしょう」(中野)
 「大小の円が激しく重なっています。目を凝らすと積層感を感じていただけると思います」(山口)

版構成



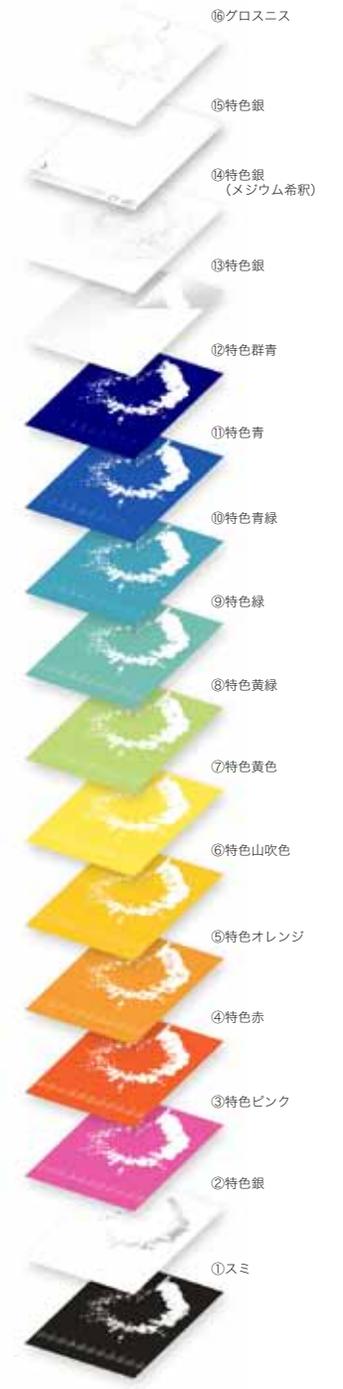
用紙：OKミュージズガリバーグロスCoC（ホワイト）／四六判 135kg

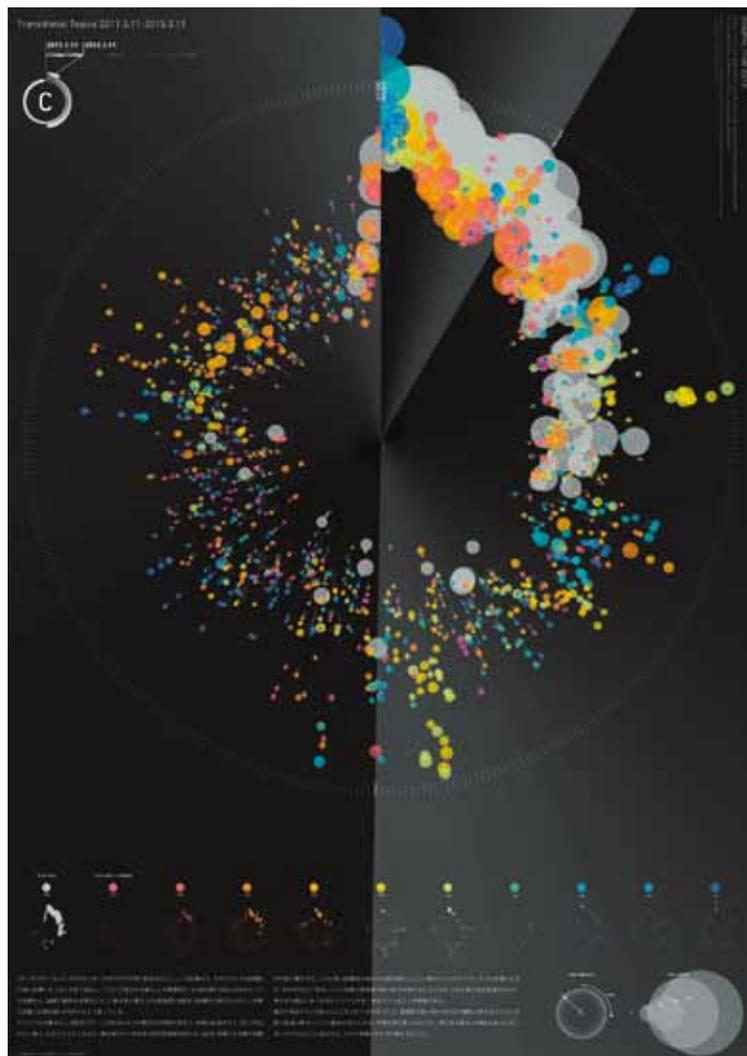
EPISODE



「この作品で使用したデータの出典は、国立情報学研究所准教授の北本朝展さんが構築したデータベースです。そこから北本さんにデータを抽出して提供していただきました。プログラミングは武蔵野美術大学教授の古堅真彦さんをお願いしました。実際にデータを視覚化したときを想定しながら設定を考え、何度もプログラムを組み直していただきました。この2人の協力者がいたからこそ実現できた作品です」(中野)

版構成





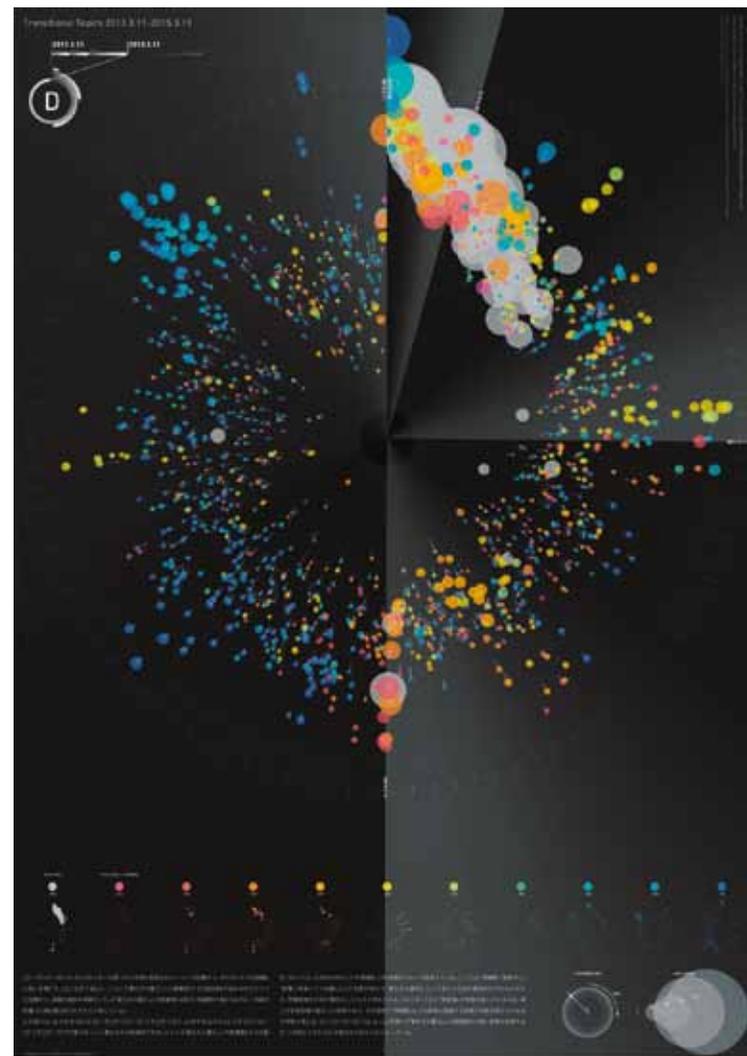
用紙：OKミュージズガリバーグロスCoC（ホワイト）／四六判 135kg

POINT



「1年間へと時間軸を伸ばしてみると、喧騒が徐々に沈静化していくのがわかります。1年を振り返る報道が多い年末や、3月11日が近付くにつれて暖色系が急増するのは、機会があることに話題が蘇るからだと思います。人々の意識の揺らぎが見てとれるグラフィックになりました」(中野)

版構成



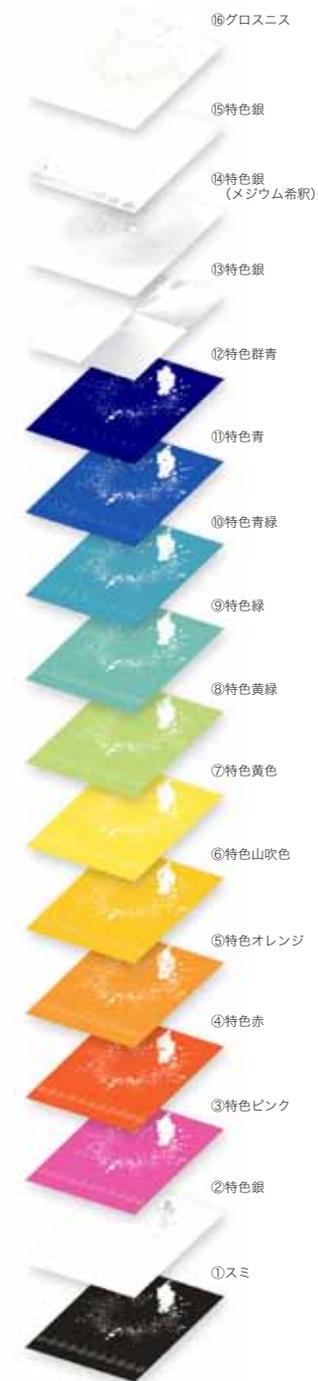
用紙：OKミュージズガリバーグロスCoC（ホワイト）／四六判 135kg

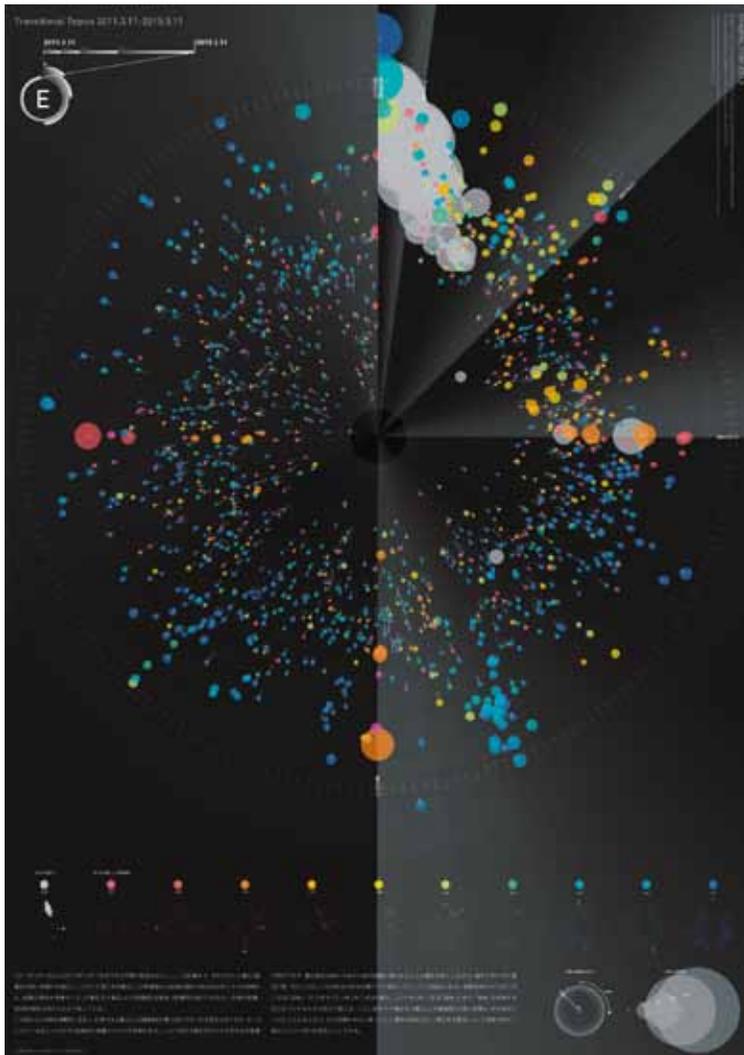
POINT



「2年間の話題を視覚化すると、1年目と2年目が暖色系と寒色系にはっきりと分かれていることから、1年という時間がひとつの区切りをもたらしていたことがわかります。震災そのものの話題より、それによって生じた社会の構造的なひずみへと話題が移っていく様子もうかがえます。なお、背景の目盛と円にかかる文字は共に銀で印刷し、背景の一部として溶け込むように設定しています」(中野)

版構成





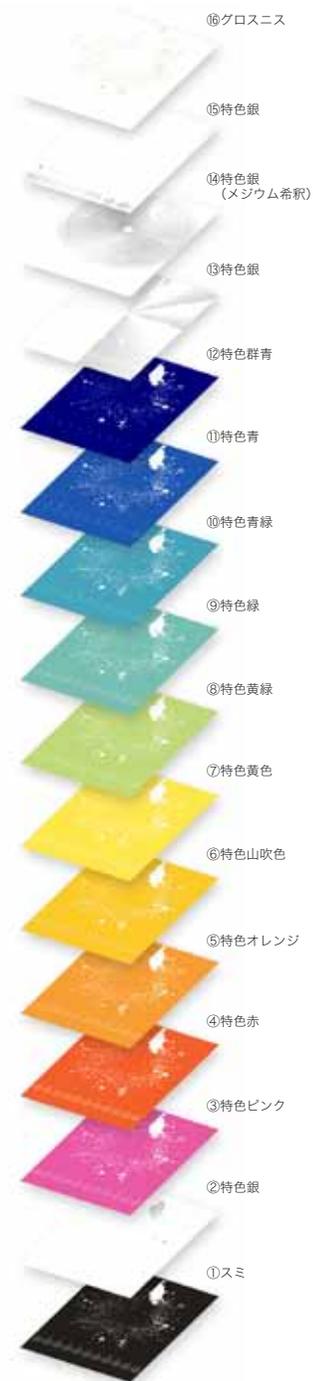
用紙：OKミューズガリパーグロスCoC（ホワイト）／四六判 135kg

POINT



「4年間を俯瞰すると、暖色の円が3月11日ごとに出現して十字型を描いています。だんだんと円が小さくなり中心に寄っていくのは、言葉の話題性が弱まって出現回数が減るからです。『東日本大震災』という言葉がメモリアルとなっていく流れがはっきりと表れています」（中野）
「グラデーションと目盛が最大となるポスターです。他と背景の印象に差が出ないようにインキ自体を薄めて銀のボリューム感を抑えました」（山口）

版構成



AFTER TRIAL

トライアルを終えて

●トライアルを終えて

今回のトライアルにはもうひとつの意図がありました。それはデジタルメディアが一般化している現代で、印刷物にする価値や意味というものを表現することでした。

もともと印刷物が好きなのは、触りながら考え、作りながらエラーを出してはまた考え、その積み重ねの総量が結果的に良い質を生んでいくという信念があるからです。データというヴァーチャルな情報をプログラミングでグラフィック化し、それを紙に定着させるプロセスを通して、印刷の物質性について改めて考えさせられました。紙やインキの質感なども生かしながら情報をどう伝えるかにトライできたことは、強い達成感へと繋がったように思います。

同時に、印刷物がつくり手の意思や責任感を強く求めるメディアであることも痛感しました。画家が「筆を置く」ように作業を終了する「止め時」を判断しなければならず、そのスリリングさを味わいつつも、もしかしたらその緊張感こそ、僕が印刷物が大好きな理由なのかもしれせん。

その一方で、ビッグデータと真っ向から向き合うことで、デジタルが情報を無限に更新できるメディアで、常に新陳代謝させることに強い特徴があることも再確認しました。今は印刷物とデジタルメディアを対立軸として見るのではなく、両者の特性を視野に入れた横断的な表現に興味を持っています。その意味でも、今回のトライアルは私にとって意義深いものになったと思います。

この作品は多くの方々の協力で成立しました。データを提供してくれた北本朝展さん、プログラミング協力の古堅真彦さん、そして印刷に落とし込むために最適な方法を探りながら多くの選択肢を示してくれたプリンティングディレクターの山口さん。フェーズ毎に協力者がいるという状況下で、僕はプロデュースとアートディレクション、デザインを含めて担当するというかたちでグラフィックトライアルに臨むことができました。「面白かった！」という一語に尽きる体験でした。

—— 中野 豪雄

●プリンティングディレクターから

印刷のトライアルと中野さんのコンセプトをいかに一致させるかが最大の命題でした。プリンティングディレクションは印刷技術を駆使しながらクリエイターのイメージに付加価値をつけることが仕事です。普段はイメージの再現が主な目的となりますが、今回はグラフィックを構成する理論と印刷の版設計を一致させることが大前提です。余計なことをすれば中野さんの意図とは違う方向に向かってしまいます。理論的制約に縛られながら印刷で何ができるか、これはかなりの難問でした。

突破口となったのが色んな方のアドバイスで試みた超リッチブラックの背景でした。情報を表す円の版をすべて刷り重ねるという試みは、抽出した情報を背景に偏在する情報のカオスの表現へと直結させ、作品の深みを増幅させてくれました。最終的には計16版。銀のグラデーション、インキ濃度による目盛の表現、円の鮮やかさと積層感など、細部にまで配慮を行きわたらせた作品になりました。理論的なグラフィックに、なんとか破綻のない印刷設計で応えられたように思います。

僕自身にとっては、データに構造を与えて社会的なテーマを浮かび上がらせていくインフォグラフィックス構築の現場に立ち会えたことも大きな収穫でした。グラフィックに対する新たな視点を得られた、たいへんスリリングで興味深いトライアルでした。

—— 山口 理一

